

4. 雨はばかにしてはいけない、とんでもない悪魔化するものもある

降雨には慈雨と細雨とかいうありがたく情緒あるものもありますが、豪雨ともなればそういって安閑としていられないさまざまなことが起きます。雨が降ると、水害や浸水といった豪雨災害に加えて、がけ崩れ、地すべり、土石流といった土砂災害が多く発生します。これまではどちらかというと西日本の方に大雨があつて災害が多いというような印象を受ける方が多いと思います。もちろん、雨が多くなれば豪雨災害が多くなりますが、土砂災害は雨の量とは関係ないことが統計的に分かっています。つまり崩れて移動する土砂があるかどうかの方が大きな要因になっているのです。例えば高知県では、雨の多い高知市で年間 3000mm（仙台市は 1280 mm程度）を超えるのに、土砂災害の発生件数は県別に言えば 23 番目で意外と多くないのです。

土砂災害は地形や地質に加えて降水の降り方や植生にもよりますが、一般的には風化しやすく浸食されやすい土質と集水地形ところで発生が多いのですが、近年は開発などの土地の改変に伴う要素も加わって土砂災害の要因は多岐化していると思われます。

崩壊が発生するために必要な最低限の雨の量を崩壊発生限界雨量といいますが、多雨地域よりも非多雨地域の方が少ないといわれています。この原因は自然斜面のこれまでの降雨への慣れによる抵抗性にあるとも言われています。そのことから雨が少ない地域では、逆に崩れずに残っている個所が多い、いわば危険な斜面が残っていることになります。ただし、最近の雨の降り方がレベルを超えたと思わせるほどに変化してきており、総降雨量も時間雨量も経験値を超えることが頻発していることには警戒が必要です。ゲリラ豪雨とか線状降水帯という言葉もそうですが、台風の巨大化や進路の変化などには注意をしていく必要があります。雨が降ったり台風が来たりすることはごく当たり前のことではありますが、大事なことはいつもと降り方が違うというような感覚が必要です。いつもと違うということは、これまでの経験ではうまくいかないことがあるかもしれない、というような構えが必要であるということです。構えとは何かといいますと、雨の降り方や周囲の自然状況の変化、前ぶれなどに敏感になって、自主的な判断で行動できるということです。

最近多発している内水氾濫ということがあります。内水氾濫は、川があふれたり堤防が決壊するのではなく、住んでいるところが上流からの流水や側溝の流水が河川に流入できずに溢れしてしまうということです。自然地形であれば降水は地表から地中へ浸透していくものですが、都市部では舗装が徹底していますので、浸透することなく側溝や路面に集中することになります。川から遠いのにどこから水が来るのだろうかと思われるほどの量が突然に目の前に現れます。瞬く間に浸水してきますので驚きます。そのようなことが起きそうなところでは、そのための対応をしておく必要がありますが、地下鉄の出入り口やアンダーパスのようなところでは浸水や貯留もしますので大きな災害が懸念されます。水深が 10cm、20cm 程度で大丈夫だと思っても、水は意外と動きも力も想像以上のものがありますので、近寄らないことが第一です。まずは、正確な情報に従って、判断や行動が望まれます。